

要求論 (Theories of Needs) — その 2 —

藤 井 龍 和

1 マレイの要求の体系とその考察

1) 生理学的要求 (physiological needs)

生物有機体に欠くことのできない物質や条件の欠乏の充足過程として生ずる身体内部の不均衡は、一般に生理的要求といわれる。これは身体の生存の維持発展と健全化のために必要な人格内の生物的・生理的な衝動機制であり、この要求が低減すれば、まともな生活 (living) を続けていくことができない。生物 (living creature) は、基本的にかかる生体維持調節を必要とするもので、それは、身体内部のホメオスタシスの不均衡がエネルギー (要求) となっている (身体→心理)。そしてこの身体的擾騷・擾乱 (physiological disturbance) は、精神的にも感じられるものである。かかる生理的要求は、体組織の上に物理的生理的变化があらわれるから体組織の要求 (tissue needs) とし、また、有機体が必要とする要求であるから有機的要求 (organic needs) ともいっている。今日、誰でも、かかる要求が基本的要求としてあることを認めている。

中世のトマス・アクィナスは感情に欲望的なものがあることを認めていたし (身体的感情)、かかる生理→心理的なパトスは、プレスコット以来、生理的要求として叙述されて来た (Maslow, 塚田毅, 阪本一郎, Kleinberg, O.). また、キャロル, L. K. フランクは、それは、身体的満足を求めるものであるとし、ソープやチョールマンは、有機体として必要な要求であるとした。かかる要求が高まる時は、体内不均衡の指標として緊張が高まるのであるが、サイモンズ (Symons, P.M.) はこれを内臓的緊張と呼び (Symons, P.M.: The Dynamics of Human Adjustment, 1946, P. 14.), 一定の臓器の要求として発生的に叙述されうるから、マレイ (Henry A. Murray) は、かかる系統の一連の要求を「臓器発生的要求 (外林訳) としてまとめている。(Explorations in Personality by H.A. Murray, 1938.) かかる臓器発生的なることは、キャノン (Cannon, W.B.) も「身体の叡智」として認めていたのであり (1932), 空腹感は胃壁の平滑筋の収縮によって生ずる不快感であり、渇きは口や咽喉の粘膜の乾燥によって生ずる不快感であることを主張している。

かかる要求の発生は、絶えざる生体の身体的新陳代謝・物質代謝に依存しているのであり、生物的ホメオスタシス内の均衡論として解釈さるべきであろう。したがって、身体内部に生ずる欠乏の充足過程としての吸気、および、飲食物の摂取に対する欲求は必然的なものであり、さらに体内の老廃物の放出過程としての呼気や排泄の要求は自然的秩序である。

それでは、どのような要求が生理的要求として指摘されているであろうか。前述の様にいろいろの学者が生理的要求を挙げているが現在のところ、マレイの体系が一番一般的である。

○マレーの臓器発生的要求 (H.A. Murray: Explorations in Personality・1938・外林大作訳編「パーソナリティ (1)」PP.68～71)

A 欠 乏 (摂取に導く)	① n 呼吸 (酸素)	積極的
	② n 水	
	③ n 食物	
	④ n 官性	
B 膨 張 (排泄に導く)	分泌 (生命源)	⑤ n 性
		⑥ n 授乳
		⑦ n 呼吸 (炭酸ガス)
	排泄 (老廃物)	⑧ n 排尿
		⑨ n 排便
C 苦 痛 (退去に導く)	⑩ n 毒性回避	消極的
	⑪ n 暑熱回避	
	⑫ n 寒冷回避	
	⑬ n 傷害回避	

さて、マレーは、「くつろぎ、休息、睡眠を含む受動の要求も考えられるが、さしあたって、これは無視しておこう」(前掲書 P69) といっているが、これを無視することは重大なミスである。われわれは、労働の後には休息・睡眠をとり、余暇を持たないことにはよう人間的な気持ちがしない。Ch. Bühlerは、新生児に於ては、睡眠(silent organization)は、1日の80%を占め、園原太郎も71%だといっている。これが、1年たつと50%位になるが、乳児は一日の殆んどを静かに休息しているのである。最近の乳児期知覚の研究によれば、1日の大部分を眠って過ごしていると思われる新生児の時期でさえ、赤ちゃんは目ざめて静かにしている。そのごくわずかな時間に、周囲の多彩な感覚刺激に積極的な用心を向けているといわれている(小島謙四郎)。これこそ、将来一人前になった時に発現すべく体制を整えている活動(manifest organization)への胎動ないしはレディネス行動である。しかしながら、大人でさえ、7～8時間の睡眠は基本的に必要だとされている(赤ん坊:15h, 5才で10h, 10才で9h, 15才以後7～8h)。現代動物学者のサリー・キャリガー(Sally Carrighar)も、睡眠の本能の存在を認めている。活動に対する睡眠・休息ないしは慰安・余暇は、人間が人間らしい生活をし、最良の人間性を維持するのに必要不可欠である。時実利彦による断眠実験(1966)では、断眠期間中、体温・血圧・心拍・呼吸数など、身体面では全く変化はみられず、食欲は却ってよくなり、体重は1.5キロも増加し、体温は昼は高く夜は低くなるリズムはくずれなかった(記録:101時間8分30秒の断眠)。ところが、精神面ではかなりの影響が現われ、断眠三日目になると、自分の意志で目ざめていることが非常に困難になり、内田・クレペリン計算テストの成績が、三日目には急にわるくなった。更に、錯覚や幻視が起り、はじめの二日間は鉛筆をとっていたが三日目には書く意欲がなくなり、ついに絵筆を投げてしまったという(被験者は23才の画家の青年)。時実は、高等な精神活動の座である新皮質は、せいぜい二日の断眠しかできないと結論づける。眠りと目ざめの発現の仕組みは、視床下部のリズム的生命活動(コリン作動性物質、アドレナリン作動性物質、代謝産物など体液性の要因)によるのであって正に生命現象として眠りと目ざめがあるのである。それで、「人間である姿」(Menschensein)を描き出そうと思えば、かかる生理的要求も認めなければならないのであって、

「安定した人格へ成長しようとする要求 (Sayles)」として必要なものであり、D.A. Prescott も、「身体的活動と適当な休養の配合と調和を求める活動と休息の要求」を生理的要求に数えている。したがって、D としてマレーの項目に次のように付加することができる。

D 疲 勞 ⑭ n 活動……身体的運動 (探索・徘徊) 及び精神的活動
(退去に導く) ⑮ n 休息……睡眠・くつろぎ・余暇活動

活動といっても、考えるという精神的活動があり、これは脳という臓器発生的なものであり、疲労という事態があれば、頭を休めたいという要求が起るであろう。

また、マレーの項目では、一応、 n_1 から n_6 までを積極的とし、 n_7 から n_{18} までを消極的としているが、これは便宜的なものであろう。精神分析学派の A. A. Brill は、「すべての行動の源は、飢えと性の 2 つに帰される」といい、C.G. Jung は、栄養 (飢え) と社会本能と性だけが一次的であるという。塚田毅は、生理学的要求には、「身体内部に生ずる欠乏の充足過程としての吸気、および水や食物の摂取に対する要求、体内の廃物の放出過程としての呼気や排泄に対する要求、一定範囲を越える暑熱・寒冷や苦痛を回避しようとする要求、休息・睡眠に対する要求、性的要求等が挙げられる」が、「これらの中重要なものは、摂食と性の要求である」といっている。

〔欲求の強さと順位〕

ワーデンらは、シロネズミの欲求の強さを次の様に記録している (Warden, C.J.: Animal Motivation, 1931)。

順位	欲 求	対 象	電撃通過数
1	母性的欲求	子ネズミ	22.4 回
2	渴 き	水	20.4 回
3	飢 え	餌	18.2 回
4	性 欲	異 性	13.8 回
5	探 索 欲	新しい場所	6.0 回

人間については、コールマンらが種々の欲求に関連のある言葉や絵に対する精神電流反射 (ウソ発見器) を測定して比較したもの並びに、キャッテルが種々の欲求に関連した話題についての記憶のよさと、それぞれの欲求に関連した絵に対する注意の度合から決めたものがある (Cattell, C.B.: An Introduction to Personality. 1950.)。

欲 求	コールマンら	キャッテル
求 偶	1 位	1 位
自己主張 (支配)	6 位	2 位
闘 争	5 位	3 位
嫌 悪 (拒否)	9 位	4 位
求 援	—	5 位
求 食	—	6 位
笑 い	—	7 位
自己卑下 (服従)	2 位	8 位
構 成	—	9 位
逃 避	3 位	10 位
好 奇 (求新)	7 位	11 位

要求論 (Need Theories)—その 2

哺 育	4 位	12位
群 居	8 位	13位
獲 得 (貯蓄)	10位	14位

ソーナダイクは、各欲求の追求に用いられた出費額から欲求の強さを求めた (Thorndike, E.L.: Adult Instincts, 1935.)

人間の欲求	出費率
食	11.2 %
寒暑湿に対する保護	10.2 %
社交的娯楽	4.2 %
性的娯楽	3.9 %
運動	0.8 %

大山正は、「これらの表に示された欲求の強さは、それぞれの研究の際の条件下に於てのみ通用するもので、これらの結果から直ちに一般論を導き出すことは危険」といっているが、それでも、摂食（飢え・渇き）、性、社交の要求は、どうも低いところはない。したがって、人間の欲求としては、動物的存在の特徴において、活動—休息という一本の軸があり、要求の Bigining Situation として、欠乏・膨張及び緊張・苦痛・疲労ということがあり、End Situation として、飽満・緊張膨張・消失・無痛・平安が存在する対極性の中において見、そこに、1つの tension-reduction があることを見、その介在変数として存在する行為型 (action pattern) を、摂食・性・社交性として系列化し、この系列の中で積極的なものから消極的なものを考えるということが出来そうである。

Bigining Situation(B. S.) End Situation(E. S.)

- A 欠乏 →→飽満
- B 膨張または緊張→膨張・緊張消失
- C 苦痛 →→無痛
- D 疲労 →→平安

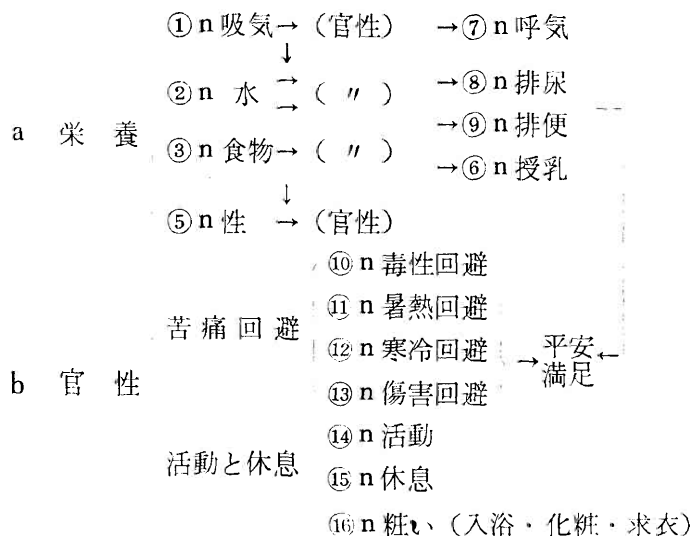
註：マレイがあげている B. S と E. S

B. S	E. S
食物の欠乏	飽満
生殖器の膨張	膨張消失
膀胱の尿	排泄
苦痛	苦痛のないこと

それで、B. Sだけを問題とするならば、すなわち、B. Sから論を起こすならば、生理的欲求は、栄養と官性の2系列しかないことになる。

猶、寒暑湿に対する保護要求は、現代人の場合、ルーム・エアコンディショナーが発達して来たから低いパーセントを占めて来たようだ。又、コングのいう社交性は、マクドゥガルでは群集性（群居本能又は群集心理）であるし、社会科学的に言えば、集合性（集団性）であるわけである。ルボン、この群集心理についてよく考察している。

要求論 (Need Theories)—その 2



〔マレイ項目の問題点〕

それで、マレイの要求項目の問題点を捨ってみる。

先ず、授乳というのは、分泌であって、汗や涙と同じく E. S. であること。しかし、性は分泌であるが、春期発動期以後は、膨張の他に、心理的なうつ積や緊張、自己卑下や無力感、征服欲などの B. S. があることを無視してはならない。そして、一足飛びに、分泌（ないしは排泄欲だとみる人もある）欲だとしてしまうのは危険であること。

また、官性については、マレーは、「n 官性は感覚的満足、殊に身体的な接触からえられる満足をよるこぶことに関係している。たとえば、味覚、触覚（例、親指をしゃぶること）」といっているが、n 食物でも、味食を文化的生活と思い、n 性でも、分泌や排泄だけが目的ではなく、女体美・男性の筋肉美・男女の健康美を美しい・望ましいと思うエロスもあるのである。それは、心理的二次的なものからではなく、多分に、身体的なコンディション (bodily condition) が関係していることが多い。N. Fenton が、いっている「健康な身体と良い立派な体格および美しい容姿に対する要求」というのも、摂食と成長ないしは成長力に非常に連関した官性の欲求というものを言っていると思われる。まず、健康な体と、健康な体のエネルギーの処理方ということを考え要求するものであるという、全一的なパーソナリティの生理的要求としてみなければならない。したがって、マレイの項目の C 苦痛（マレイは傷害としている）の n₁₀ n₁₁ n₁₂ n₁₃ は、良き官性を求めるものであることを先ずあげねばならない。したがって、a 栄養（飲食物の摂取から排泄へ食の欲求）欲求の系列と並列的に、しかし関連づけられて、b 官性（活動と休息にわたる衣・住の欲求）の欲求の系列があるということになる。

現代の生物学者らは、本能として、(1) 栄養本能、(2) 生殖本能（この中には子どもを育てることも含まれる）、(3) 睡眠の本能、(4) からだの表面の手入れの本能（たとえば、羽毛の手入れをするとか、からだに寄生しているものを取り除くといったようなことなど）、(5) 社会的本能、の 5 つを数えている (Sally Carrighar) が、この中の (4) は、⑯ n 粧い（の行動）として、b 官性の苦痛の回避の系列の中に入れるべきである。a 栄養は b 官性に働きかけるが、a 栄養の活動（摂取から排泄へ）の中には、官性の要素が当然入ってくる。しかし、ここにおける考察は、原初的には臓器発生的なるもののみを考察すべきで二次的な心理的なものからの欲求、たとえば、戸川のいう文化的なるものからの官能欲求（話

すことの大部分、遊ぶことの大部分)を考えるべきではなく、より、生理的な次元を考えなければならない。したがって、戸川のいう活動的官能欲求(走ること、歩くこと、発声の欲求)は、より植物性自律神経的であって(走ること歩くことは消化と関係しているから)栄養→官性の欲求といえる。

とにかく、生理的欲求というのは、H.A. Murray もいうように一次的欲求なのであって、動物性神経系統が従となって、植物性神経、自律神経系統の健全さを目的とする欲求であるといえる。したがって、この生理的欲求が安定し、摂取から充足へ、緊張から慰安(comfortable)へ、リズムカルに生命の律動が経過し維持されるところに、人格の不動心がまず形成されるのである。古来から、かかる不動なる力強い気浩然の気を養うために、摂食と運動の適度の調節が説かれたのである(養気説)。

II マレイの心理発生的要求

マレイが述べている一次的な臓器発生的要求は、身体を源泉(source)とする必要から生じた生理的要求である。それは、飢と渴、活動と休息、分泌と排泄、諸種の環境に対応する調節(accomodation)等で、その究極の目標は、個体維持乃至は生存(survival: 今田恵)である。

これらの生理的要求は、ホメオスタシス(拙論: 行動の生物・社会的次元 ―要求論の基礎(2)～参照)によって維持されている。

さて、そこで、生理的な要求を、その動因の先天的、原本的、生理的である故に一次的要求(primary need)とし、後天的、派生的、社会的な二次的要求(secondary need)と区別するという方法を、一般の学者はとっているのであるが、マレイは、そういう方法をとらなかった様に思える。

先天的、原本的、生体的、生理的、なるものは、一次的であるから、これらは、一次的要求、一次的動因、一次的動機としてよく語られる。又、後天的、派生的、習得的、社会的なるものは、二次的であるから、二次的要求、二次的動因、二次的動機としてよく語られる。(これは発達の発生論的に考えられている。)

しかし、社会的なるものも、一次的なものと考えられる(ユング)。人間が社会的存在である限り、上記の様に、後天的、派生的、社会的なるものも、一次的に必要な要求だと考えねばならない。

マレーは、大抵の学者が画一的、二次的と区別することをさげ、これらの二次的なものを、人格の変数として記述している(Henry A. Murray, M.D., P.H. D.: *Explorations in Personality* 1938. → マレー編・外林大作訳編「パーソナリティ(1)」133 頁以下)。

しかし、今田恵は、人間の要求の発生的観点を考えに入れて二次的動因として、このマレーの人格変数の内容たる要求を例にあげている。彼に言わせれば、社会的価値たる文化的基準も二次的動因の対象となるというのである。法律、道德、宗教、学問、芸術、政治経済、習慣は、直接、生理的要求に関係はないけれども、二次的に、人間生活の動機となるというのである。こうして、マレーの作った人格変数の項目を、二次的動因にあたるものとして例証している。それで、その表をここに再録してみる。

(マレイの)心理起原的要求の種類

A 主として無生物と結びついた要求

1. 獲得(Acquisition)……所有物、財産を得ようとする要求。

要求論 (Need Theories) — その 2

2. 保存 (Conservation) ……蒐集, 修理, 掃除, 貯蔵する要求。
 3. 整頓 (Orderliness) ……配列, 組織し, 片づける要求。
 4. 保持 (Retention) ……所有を続ける。集める。惜しむ。節約する。吝嗇になる要求。
 5. 構成 (Construction) ……組織, 建設する要求。
- B 大望, 意志力, 達成欲及び威信の要求。
6. 優越 (Superiority) ……優位に立つ要求。成就と承認との複合。
 7. 達成 (Achievement) ……障害に打ち勝ち, 力を発揮し, できるだけよく且つ速く困難なことをなしとげようと努力する要求。
 8. 承認 (Recognition) ……賞讃を博し, 推挙され, 尊敬を求むる要求。
 9. 誇示 (Exhibition) ……自己演出し, 他人を興奮させ, 面白がらせ, 感動させ, 驚かせ, はらはらさせる要求。
 10. 保身 (Inviolacy) ……中傷されず, 自尊心を失うことを避け, よい評判を保とうとする要求。
 11. 劣等感の逃避 (Avoidance of inferiority) ……失敗, 恥辱, 軽蔑, 嘲笑を避けようとする要求。
 12. 防衛 (Defensiveness) ……非難または軽視に対し自己を防衛し, 行為を正当化せんとする要求。
 13. 反撃 (Counteraction) ……再挙報復によって, 敗北に打ち克とうとする要求。
- C 人間の力を発揮し, それに抵抗し, または屈服することに関係のある要求。
14. 支配 (Dominance) ……他人に働きかけ支配せんとする要求。
 15. 服従 (Deference) ……優越者を褒賞し進んで追随し, 喜んで仕える要求。
 16. 模倣 (Similance) ……他人を模倣し, 競争し, 同意し, 信じる要求。
 17. 自律 (Autonomy) ……働きかけに抵抗し, 独立を追求する要求。
 18. 反動 (Contrariness) ……他人と異った動作をし, 独自のであり, 反対の側に立つ要求。
- D 他人または自己を損傷することに関係のある要求。
19. 攻撃 (Aggression) ……他人を襲撃し, 損傷し, 人を軽視し, 傷つけ, 悪意的に嘲笑する要求。
 20. 謙虚 (Abasement) ……罰を承服甘受し, 自己を卑下する要求。
 21. 非難逃避 (Avoidance of blame) ……仕来りに反する衝動を抑制することにより, 非難, 追放, 所罰を避け, 行儀をよくし, 法に従う要求。
- E 他人との愛情に関する要求。
22. 愛情 (Affection) ……友情と交友を作る要求。
 23. 排斥 (Rejection) ……他人を差別し, 擠斥し, 無視し, 排斥する要求。
 24. 養護 (Nurturance) ……他人を養い, 助け, 保護する要求。
 25. 依頼 (Succorance) ……援助, 保護, 同情を求め, 依存する要求。
- F その他社会的な要求。
26. 遊戯 (Play) ……緊急緩和, 娯楽, 変化慰安の要求。
 27. 求知 (Cognizance) ……探索, 質問, 好奇の要求。
 28. 解明 (Exposition) ……指摘, 例証, 報知, 説明, 解釈, 講演の要求。
- (今田恵著「現代の心理学」167 頁~169 頁¹⁹⁵⁸, 1964⁸, 岩波書店)

ここで、今田氏は、二次的動因の表としないで、心理起原的要求の種類としてあげていることに注意したい。要求論の一般的概念を把握するには、勿論、発生的系譜からみなければならない。そして、一次的、二次的と区別するのはよい。しかし、形式上の人格 (modal personality) の内容として考える時には、ユングの様に、心理発生的なるものも、一次的に必要な要求発生機序と考えねばなるまい。ユングでは、その故、栄養 (飢え) と社会本能と性だけが一次的であるという。その論理から考えるならば、マレイの心理起原的な要求は、当然、人間の生活に、一次的に必要な要求であるということになる。何故なら、人間は、社会生活をするものであり、諸種の感情が分化しない infant でさえ、それを、それというのは、心理発生的要求が必要とされるのだということがいえるからである。

この辺の事情は、学者によっていろいろと言われており、J. B. Watson などは、生理学的要求も一次的だとみていない。彼はいう「われわれ行動主義者には、本能というものは無い。つまり、われわれはもはや「本能」という術語を必要としない。われわれが今日、「本能」とよびならわしているものはすべて、大部分訓練の結果である。つまり、それは人間の学習行動の 1 つである。」(ジョン・B・ワトソン著、安田一郎訳、「行動主義の心理学、河出書房、118 頁、1968)「私たちは、もはや「能力」(faculty) も信じていませんし、「才能」(talent) や、遺伝された「能力」(capacity) といった名前に入る紋切型の行動の型も信じていません」(前掲書 125 頁)と。そして、彼は、人間を理解することが出来るのは、刺激 S と反応 R からだとする。こうして S と R がわかれば、人間の将来の行動も予測することができるのだという。

ラザラスは又、ユングの観点と異って、心因性のものを二次的欲求として紹介している。

○マレイが重要とみなした二次的欲求として次のものを挙げる。

- n 所得—財 (産) を得たいという欲求。
- n 達成—障害を克服し、力をはたらかせ、困難な仕事をうまく早くしたい欲求。
- n 支配—他人に権威をもち、統御したい欲求。
- n 自律—権威や強制に抵抗したい欲求。
- n 攻撃—他人を攻め傷つけようとする欲求。
- n 親和—友情と共同を形成しようとする欲求。
- n 育成—無力のものを育み、助け、保護しようとする欲求。
- n 救援—助け、保護、同情を求める欲求。
- n 求知—尋ね、探索し、知識を求め、好奇心を満足させたい欲求。

(Murray, H.A.: Explorations in Personality. New York: Oxford University Press 1938 [ラザラス、帆足喜与子訳「個性と適応」現代心理学入門 4、岩波書店、1966 : Richard S. Lazarus, Personality and Adjustment 1963)。

これらの心因性のものを二次的とみる観点は、満 3 才以後から形成されるとみなければならないであろう。それ以前の前期とこれ以後の観点は、ワトソン流にいわせれば、訓練即ち、学習されるものとみななければならないであろう。

二次的のもののうち、例えば、達成一つをとりあげても、賞罰と報酬によって動機づけられるし、子供は、罰するよりも賞の方が有効でよいという実験結果もある (Hurlock, E.B.)。二次的なものは、馴化か条件反応か学習的行動であるとするならば、そこに個体が育成される場には、如何なる要因が働いているのであろうか。二次的なものは、一次

的なものから、当然派生して来るのであろうか。馴化によって当然出て来るのであろうか、或いは条件反応によって当然条件づけられるのであろうか。達成の要求は、障害を克服し、力をはたかせ、困難な仕事をうまく早くしようとする欲求であるという。そうするならば、この二次的なものの要求発現は、学習することであるとみなし、そしてその本当の実現は、心理的離乳が完成する青年期にまたねばならない、理性が本当に出て来る11~12才頃にまたないといけないということになる。

そうすると、私が問題として来た一次的、二次的の区別も、modal personalityの所在も、青年期をめぐにしなければならぬ。それ以前は、フロイドがいうように、前性器期(pre-mature)とみななければならぬ。

従って、こういう見方が一つ提起されよう。pre-mature期は、知・情・意が一体的・統一的・直線的・一体的とみる見方である。すなわち、心は白紙で、経験によって色づけされるというロックの見方によれば、pre-mature stageの生活史が如何に大切な人間形成の時期であるかがわかるのである。この観点に従えば、一次的・二次的説明が成り立つ。これは動的発達の観点に立たなければならぬ。そういう観点に立つことによって、心因性のものも、心理起原的なものも、よりよく説明されるであろう。それぞれ、個体には、生活史(Lebensgeschichte)があり、それを理解しないことには、どれが一次的で、どの要求が二次的であるか、決定し難いであろう。

佐藤幸治氏は、マレイの人格の変数の表をあげた中で、要求活動の形式を一緒に掲載している(佐藤幸治著「人格心理学」心理学全書11, 創元社刊, 1961, 145~146頁)。

C 要求活動の形式

a Motones 身体表現型

1. Exterofactive system 外作用系
2. Enterofactive system 内作用系

b Verbones 言語表現型

C Ideological 観念的……要求の向う方向が人でなく観念である。

d Intravertive 内向的……内攻撃 Intraggression は自己をとがめ、傷つける。

e Latent 潜在的……禁止、抑圧された潜在要求は、ファンタジー、遊戯、芸術創作、宗教儀式などに間接に現れる。又異常行動、著しい心内効果をもたらす。一番多く禁止されるのは、屈従、攻撃、認識、支配、顕示、性、同性愛、被護の8つである。

f Focal 集中的……反対は diffuse 拡散的(曖昧化)

g Egocentric of Sociocentric 自己中心対社会中心。純粋に個人的(自己愛的)な要求に対して、社会的圧力が生んだ要求。社会中心の攻撃要求(外向的の一部か)、社会中心の支配要求など。

h Infravertive and Supravertive 劣者に向うと優者に向う。劣者に向う友誼要求、優者に向う攻撃要求(権威に対する反権威)。

そして続いて、要求の特性には、一般的に次の要因が関係しているという。

1. Anxiety 不安。
2. Creativity 創造性、独創性。
3. Conjunctivity/Disjunctivity ratio 統合と分裂の対極的二重性。
4. Emotionality/Placidity 興奮性と平静性の対極的二重性。
5. Endurance 頑張り……Flustration Tolerance (フラストレーション耐性)といえ

るもの。反対は, Transience 移り気又は impersistence 意志薄弱。すなわち, 意志の強さと弱さの対極的二重性。

6. Exocathexis/Endocathexis ratio 外執着と内執着との比。外給付性と内給付性との比率の如何。
7. Intracathexis/Extracathexis ratio 多感と明徹との比。
8. Impulsion/Deliberation ratio 性急と慎重との対極的二重性。
9. Intensity 強烈さ。努力 (Streben, striving) の強さ。
10. Projectivity/Objectivity ratio 主観性と客観性との比。投影性と批判に耐えうる力との比。
11. Radical sentiments/Conservative sentiments ratio 過激な感情と保守的気質との比。
12. Sameness/Change ratio 志や気持を変えない, すなわち行為の一貫性と, 一つのものに落着けない, 馴れ馴れしい不安定性との比。
変化はまた不安定性の要素であるということ。

そして, 氏は, 人格内部の因子としては, マレイが, 次の 4 つの因子をあげていることを指摘している。

1. Ego Ideal 自我理想
2. Narcissism 自己愛……これはフロイドも認めている。
3. Superego Integration 上位自我統合
4. Superego Conflict 上位自我葛藤

こうした文脈から考えてみると, ワトソン流の刺激 S と反応 R との間の関係だけでは人間の行動の源因となる要求を理解することができない。そこには, 刺激と反応との間に, 個体 O を導入しなければならぬ。こうした, S—O—R 説をとる学者には, Hull や Tolman や Woodworth がおり, Hull は主に, 習慣 Habit に注目し, Tolman は sign behavior に注目した。又, Woodworth は, 本能 (主に drive theory) に注目した。しかし, この三人の学者に対して, 何故か, 本能を採用した Woodworth に対する目は冷淡で, 前二者のみを新行動主義としている。誠に, そうした観点を入れると本能を採用するより, 習慣や記号行動を採用する方がもっと要求の機序も明らかになるのではないかと思われる。私は, 今, このことについて触れることはできない。

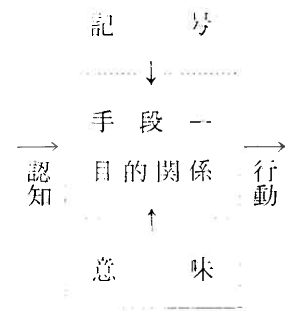
ただ私はここで, ヘンリー・マレーがいつている「《欲求》という述語は, 行動や知覚をその他の認知過程を満足に至らしめるよう組織立てる心理的な力にあてられたものだ」ということばを引用しておこう。

ただ, 新行動主義 (S—O—R 説) についていえることは, 次のような点である。

先ず, Hull の場合には, 習慣を採用した。そこで示唆されることは, 習慣と要求との関係をどうみるかである。そうすると, 養育者と習慣形成が, 要求の発現に対して, どの様に関係するか, ということが示唆される。すなわち, 社会的なるもの, 文化的な要因が要求の発現をどの様に支持するかという機序を明らかにしなければならないことが指摘されよう。

次に, Tolman の場合, sign gestalt なるものを仮定するのであるが, その Gestalt の枠組の中には, 記号 (sign) と意味体 (significate) との間に手段—目的関係があるということである。従って, 要求の対象を記号とすると, 人格は 1 つの意味体 (the sig-

nificate) を自己 (self) の内に受納して, tension reduction を行うと考えられる。従って, サイン・ゲシュタルトの場に於て, 1つの刺激に対して, 何が重要な意味 (meaning) であるかは, 生活体 (O) の事情によるということになる。この O の事情によって, その独特な反応が生起するといことがいえる。



第1図 サイン・ゲシュタルト

次に Woodworth の場合は, 本能を採用したが, この要求発現には, 1つの力 (drive) があると考えた (→動因)。しかし, ここで示唆されることは, Mc Dougall の情意理論に還るべしということである。先の Tolman の場合のサイン・ゲシュタルトの場合, Hull の習慣形成の行われる場にしても, 情意的側面を無視してはならないということである。記号の認知にしても, この情意が深く関わりあっていることを見逃がしてはならないであろう。従って, S—O—R 説に関して, 要求の問題を述べるならば, 次の諸点の問題を追求しなければならない。

1. 社会的存在としての生活体の環境の問題。
……親子関係, 仲間集団との関係, 母子関係。テレ (socio and psyche)。
2. 文化的存在としての生活体の文化事情の文脈に於ける位置の関係
……生活様式, 習慣, 意味。シンボル。
3. 個体の内部要因
……情意的事態, 認知と態度, 誘因と動機, 願望 (desire) と適応, 要求と価値 (the desirable)。

以上の様な問題が, 残された問題である。従って, さし当りは, 2つの観点にしばられる。

1. Watson の様に刺激と反応の関係からみて, 個体の内部要因たる, 本能, 習慣, 意味を無視して, どこまでも, 社会的事情, 文化的程度を問題とするか,
2. Murray の様に, 社会的・文化的なるものは環境 (environment, circumstances) の問題として, どこまでも外在的なものとして, パーソナリティの問題は, 生理的なものと, 心理的又は心理起原的なものに止めておくか,

以上の2つの立場があるということが結論的にいわれるであろう。

従って, マレーが重要な基本的な要求とみなしたのは, 一次的には生理的要求であり, 二次的には心理起原的要求であったのである。そして, マレーの記述で, 生理—心理的系列の傍には, 常に社会的—文化的系列があることを見逃がしてはならない。従って, われわれは, マレーの臓器発生的要求と心理的要求について深い理解を成さねばならぬ。又, この分類の中には, 感情的要求も折り込まれていることを知らねばならぬ。しかし, ここではこの問題に深く立入ることを避けて, 以上の点を指摘するに止めたい。

付 資 料 (訳)

- (1) ソウレーとテルフォードの学習に於けるモチベーション (J.M. Sawrey & C.W. Telford : Educational Psychology. Boston Allynand Bacon, Inc. 1958. Chapter I. The Motivation for Learning pp. 15.)

動機づける (motivate する) ということは, 文字通り, 運動を惹起する, 誘因するこ

とを意味する。しかし、われわれは、この語をもっと限定された意味に使う。

「motive (動機)」 「motivation (動機づけ, 欲求: 梅本堯夫)」 「motivated behavior (動機づけられた行動)」 という用語が、通常適用されている事態を験べるならば、刺激 (stimulation) や、目標方向 (goal direction) 行動傾向 (behavior trend) によって、永続性 (persistence) の度が性格づけられていることを知る。

(従って), 「Motivation」は、比較的長い期間をもつ過程をいう。「Motive」も、(従って), 永続的な条件がなければならない。——通常その条件は、個人の内部に存し、例えば慢性的な飢え、人間の権威に対する遂げられない願望 (desire) として表明される。

(従って又), 「Motivated behavior」は、永続的・目標志向的活動である。それは通常継続的・系列的性質をもっている。こうした活動は、motive を満足さず事態や条件を変えたり或は、貫通さすかの何らかの事がなされる迄継続する。

こうして motive を定義すると、事態を変化させ、又は永続させる方向に向けられた、永続的・目標志向的活動を、個人に惹き起させ、又は、準備する、比較的永続的な内的条件ということになる。

さて、「motive」と「incentive」は、屢々相互変換的に使われるけれども、同義ではない。「incentive」は、goal object に関係し、motive を惹き起したり、満足させたりする場合の条件や変化をいう。(incentive の例→food, sex, money, school grades, awards diplomas) 多くの incentive は、生物学的な要求 (飢えたる人に対する水の如く) に対するその個有の関係の故に、動機づけるのである。そして、incentive は、外的な対象であり、条件であり、動機 (motive) が、方向をもっている、その方向の事態である。

Relationships among various motive-related terms and concepts

Need+Impulse to activity=Drive

Drive+goal-directed behavior=Motive

Motive+Attainment of goal=Need-satisfaction

Need-satisfaction→Drive-reduction

Drive-reduction→Diminution of impulse to act.

(2) キャロル (Carrole) の Mental Hygiene (精神衛生) に於ける Needs の分類。

1. Drives or Needs について

drive と need という 2 つの用語は、instinct という older concept と殆ど完全に取って代っていった。この 2 つの比較的新しい用語は、instinct よりももっと flexible (柔軟性ある) である。それは、motives (動機) と結合した時、これらの用語は、biological inheritance (生物学的遺伝) の効果と同様に、学習及び、social inheritance (社会的遺産) の効果を含んでいるからである。

1 つの drive は、有機体の中に (於ける) 活動を起こし、その活動を支持する惹起された反応傾向である。それは、個人の一般的活動水準を増大する。drive は、刺激の強さに依って、大きかったり、小さかったりする。drive は、通常、一次的と二次的の 2 つのカテゴリーに分かれている。

primary drives……physiological

secondary drives……social

Need は、drive (動因) と非常に類似の意味を持っている。それは、個人の optimum equilibrium (〔生長・繁殖の〕最適条件を有する平衡) を動揺さす imbalance (平均を

失った状態、不安定=lack of balance) 不均衡を来たす1つの欠陥(状態)(欠乏状態)を表明する。この欠乏は、有機体の中に活動を起す。それは action につながる刺激物である。

4つの Needs……：

need for adequacy (十全要求, 適当要求, 充分要求)を満足さす為には、いくつかのテクニックの集合が使われる。実際の諸目的のために、著者は、これらを4つのカテゴリーに分った。

need for adequacy

1. the need for physical security 身体安全の要求
2. the need for emotional security 情緒的安定の要求
3. the need for achievement
達成の要求
4. the need for status
地位の要求, 成就の要求

これは任意的な分類である。これらの needs のどれも、孤立して存在することはない。個人は常に、a total personality として働く。しかしながら、事態が変わると、これらの要求の1つは、頭角を現わし、他の全ては、その基底となる。これらの要求は、意識のより低い水準に帰せられる。

1—Physical Security 身体安全

biological needs は、屢々過度に強調されて来たけれども、それにも拘らず、これらの要求は、明らかに重要である。

the basic physical need というのは、内的平衡 (internal equilibrium) の維持を通じて、安全 (security) を達成することにある。

これは、air hunger(空気に対する要求)、sleep hunger(睡眠に対する要求)、food hunger (食に対する要求)、sex hunger (性に対する要求)のような、いくつかの physical subneeds を通じてなされる。我々の人生の可成りの部分が、これらの要求を満足(充足)する為に費やされる。例えば、睡眠の要求に付合するために、われわれは、われわれの人間の一生の約1/3以上のものをこの為にささげている。これらの要求のどれかが極度に不満状態になると、この不満要求が、欲求不満を経験する人間の極度の注意を殆ど奪ってしまう。しかしながら、学生の精神衛生にとって最も重要な意味をもつ2つの physical needs とは、food hunger と sex hunger である。

長い間、人間が食物から見離されると、food hunger の drive が、どんなに強力になるかということを、個人的な経験から認識している人は、われわれの中では、殆どいないけれども、一般には、誰も、food hunger の経験がある。正常の個人に於ては、hunger pangs (飢えの苦しみ)は、胃壁の収縮によって起る。時間の経つにつれ、これらのリズムミカルな収縮は、濃度を増し、長くなり、漸次強くなる。個人は、これを経験すると、落着かなくなり、活動的になり、勿論、より food に対して反応するようになる。彼は、明確な要求を感じ、それを充足しようと試みる。

明らかに、莫大な量の human energy が、この1つの organic need の充足のために捧げられる。人々の可成りのパーセンテージが農業に従事し、その主要な目的が、food を供給することなのである。

更に、達成への主要な drive は、食料品店の付を支払うに足る金をもうける必要からなのである。確かに、need for food は、人間行動の主要な第一の刺戟者 (a prime motivator of human behavior) である。

最も frustrate され易い傾向のある physiological need は sex である。これは、一部は、われわれの文化が、多くの taboo でもってこの動因を囲繞しているという事実に依っている。個人は通常、自分の願望 (desires) の十分な表出を望んでいる。1つの desire の充足が、集団規範と衝突するものを含んでいるならば、必然的に、ある一定の量の conflict が結果する。われわれの社会は、禁示 (inhibitions) や抑圧 (repressions) を sex needs の充足に際して課す。かかる禁止や抑圧は、behavior disorders (行動の無秩序・混乱) の最も重要な原因の1つを構成する。

2—Emotional Security 情緒的安定性

全ての need あるいは、motive は、情緒的な付随的 (相伴物) を持っている。随伴的情緒は、組織的であるか、あるいは、分裂的かのどちらかである。個人は、常に、balance や security を求め (努める) ことによって、組織的、あるいは統合的情緒経験を達成することを試みる。そして他方、分裂的情緒経験を避けることを試みる。彼は自分の needs を、自分の仲間からの批評や拒絶よりも、理解と受容をもたらす仕方に於て、満足さすことを求める。彼は、望ましい (pleasurable) 条件を維持し、増大することに努め、怒り・恐怖・不快のような情緒の状態を破棄したり、減じたりすることを試みる。彼の社会的関係に於て、彼は、非難 (blame) によってよりも、賞讃 (praise) によって、より利益を得ている。賞讃は positive であり、blame は negative である。賞讃は、one's feeling of emotional security (情緒的安定感) を増大さし、一方、非難は、それを減ずる。若し彼が長い期間にわたって、sharp な criticism に従っているならば、その人の emotional balance を維持することが出来るという人は稀な人である。

3—Achievement 達成の要求、成就の要求

Human beings は、空の中に存在しない；人間は、環境の中に存在する。人間が生き続ける筈であるならば、人間は、彼らにとって意味がある彼らの環境のその分節のマスターの仕方を学習しなければならぬ。それは非常に明らかに truism である。need for achievement が遺伝的であるという何らの妥当な確証はない。しかしながら、出生から——あるいは、そのことのために、受胎から——個人は、少くとも自分の環境をいくらかでも統制を得ようとする常時の闘争状態にある、という確証は多い。更に、個人は、Adler や Combs や Snygg が指摘したように、直接的な現在の自己を維持するに足る丈のことを達成するに至っていない (に満足していない)。

Human beings は、未来の中に自己自身を投げる (企投する) ことが出来る、従って (その結果)、人間が達成 (achievement) を求めることの中には、プラスの factor がある。人間は、未来に対して (対抗して)、準備 (貯え) を形成しようと試みる。

われわれの文化に於ては、達成は、従って、可成りの社会的な意味合 (significance) を持っている。われわれの社会の中に生れて来た一人の子供は、正に人生の初期に、成功は報酬を齎らす、ということを学習する。報酬は、自己 (the self) を高め、従って、自己をより安全に (secure) 感じさせる。

need for achievement を満足さすためのテクニックは、全てわれわれのまわりに見られ得る：ブロックの山を一生懸命造ろうとしている幼児に：1つのコースの「A」をかせ

こうと試みている時の college student の場合に：難かしい問題を解こうと苦心して骨折っている研究者に：自分が織ったバスケットや自分が編んだ敷物に大きな誇りを持っている精薄施設の同居人（寄寓者）の場合に。これらの need（達成の要求）が満足されるのは、人の mental health（精神衛生）に必須であるからである。

4—Status 地位に対する要求

need for status or social approval（地位の要求，あるいは，社会的承認の要求）は，ある psychologists によると，本能と見られている。そして，また，他の心理学者によると，それは，学習された結果の自動的要求（an autonomous need）と見られている。この章に出て来る初期の分類で注目されたように，この need の存在に関しては，一般的な一致がある。それは，a separate category の中に，位ずしも置かれていない，ということである。確かに，それは，need for achievement と密接に関連しており，又亦，need for emotional security と密接に関連している。

しかしながら，mental hygiene の実践的上演の目的のためには，それを，a separate need（1つの分離した要求）としてリスト・アップすることが望ましい。しかし，どんな need も，現実には，独立して存在するものでなければならぬ。

human beings は，社会的（群居的 gregarious）であるから，human inter-relationships（人間相互関係）は，行動の motivation を可成り重要視している。self-respect（自尊心）を維持する為に，人は，他人も尊敬しなければならない。是認（approval）が結果するような仕方で振舞えば，彼は，快的な情緒的状态（a pleasant emotional state）を経験する；地位を失うような仕方で振舞えば，不快な（unpleasant）情緒的状态が結果する。快の情緒的状态を望めば，彼は益々，どんな是認（approval 承認）が彼に意味を持っているかということを意識するようになる。しばらくしてから，need は学習され，彼の人生を通じて，彼と共に滞留する。彼は出来る限りに於て，受容（acceptance）や賞讃（applause）をもたらす，だろう役割を演ずる。彼は属する（belong）ことを望む（need for belongingness）から，そうするのであり，彼の承認された行動が，彼の個人的な価値感を高揚さすから，そうするのである。

（Carroll, H.A.: Mental Hygiene—

The Dynamics of Adjustment. Englewood Cliffs, New Jersey.

Prentice-Hall, Inc., 1965. pages 20, 31~34.）

(3) Hall, J.F. の Primary and Secondary Needs

屢々疎外過程（除去操作・喪失操作剥奪作用 deprivation operations）によって生み出される有機体の生物学的な要求，すなわち，一次要求（biological requirements or primary needs）は，動因（a drive）あるいは，動機（a motive）の樹立のために重要な妥当な先行条件（appropriate antecedent conditions）として考えられてきた。（操作になる）実験の文献のある調査（data）は，動物の食や水に対する要求がそのように使われて来た，という多くの特殊な諸例を，明らかにして来た。不幸なことに，このような食や水の要求はそれらの食や水が同時に，動機的な理論づけを支持する方途と同時に，手にしうる容易さは，また，ある困難性を不明瞭にして来た。というのは，drive や motive の概念を anchor さすべき一般的条件たる need states の使い途に関して，ある困難が存するからである。

a motivational system を樹立する際の 1つの基礎となるべき，need status を使う際

の1つの困難は、その特殊な決定傾向の中に横たわっている。すなわち、a need とは何か？ということ、われわれはどのように決定することができるであろう。多くの個人は、有機体の一次的な諸要求は、本質的に不変である、ということと、その充足 (satisfaction) は、optimally healthy organism (最適の健康的な生活体) に於て結果する、ということとを仮定して来た (と思っている)。optimal health (最善の健康) の標準は、しかしながら、確めることは難かしい。病気がなく、病から自由を得ている。ということと、最善の成長と longevity (長寿) は、最も屢々使われる最初の存在を以った3つの標準である。健康を維持するに足る食事が、有機体の primary need を表明するならば、こうした標準は確かに妥当である。

Snapper (1955) が書いたように、しかしながら、食事と相連関している標準を評価する際に、1つの困難が生じる。西欧世界に於ける標準的食事は、全カロリー摂取量の55%を供給する carbohydrates (炭水化物・含水炭素) 30%を供給する脂肪、14%を供給する蛋白質からなっている。東洋に於ては、全カロリーの80%から85%、時には、90%までの炭水化物がとられている。蛋白質は5~10%、脂肪は7~8%である。カルシウムとあるビタミンの摂取量は、従って小さい、カロリーの数は小さい。例えば、Filipino は、平均対照的なカロリーに於て、2180カロリーから2500位になる。東洋の low protein, low-caloric の食事は、結核のまん延を増し、多くの伝染病に対する抵抗を減じていることは、今や本当のように見える。他方、西洋の食事は、痛風、糖尿病 (皮膚の) すり傷、腎臓結石、早期硬化症を結果するように見える。東洋との対比に於ける西洋の摂取の仕方は、食事と連合した病気の重さに関して、観察者によってなされた1つの value judgement に依っている。optimal health を定義づけることができることができないということは、need を定義づけることができない、というところに結果している。need の標準は、その時、不変ではない。

第二の困難は、need states から生ずると仮定される行動に関係している。ある実験的仕事は、a need states の行動的産物あるいは特徴は、activity である、ということを示した。——従って、chapter 3の実験的証拠に於て関係している need-activity relationship は、有機体が、食や水に対する要求を持っている時、かかる関係を、支持するために得られうる。しかし、他の諸要求についてはどうか？酸素に対する要求は、carbon monoxide を吸込む個人の行動によって、とらえたる increased activity に於て結果をもたらす様には見えない。a deficiency in thyroxin は、確かに、a human organism の一次的要求は、mental and physical sluggishness (身心の緩慢、懶惰) に於て、結果をもたらす。一般に、activity に於てより in-activity に於て、ここに於て、正に、drives or motives を anchor すべき a general condition として need states の効用は、明らかな困難を持っているというべきである。

——Acquired Drives or Needs

逸話的証拠は、減多に、primary drives or needs は、青年大人の motivation に於て重要な役割を演じていないということを暗示する。寧ろ、行動は、a psychological variety——すなわち、achievement, security, recognition affiliation (交誼、友誼、信頼) 等々からなるもの——の諸要求に関係しているように見える。

結果として、varying mechanisms は、これらの諸々の motivational determinants の発達を、「explain (説明する)」(明らかにする)、あるいは考量する (account for) こ

とを以て、(事実として) 仮定 (措定) して (=postulate) して来た。

重要な motivational antecedent であるという本能が定立された (postulate された) 時、正に、Woodworth (1918: 註) は、次のようなことを知った。……本能には無数あると考えられるが、そのうちのいくつかを定立することは、人間の行動を全て、考量することにはならない、というのである。この問題に対する彼の答えは、2つの component parts: : —mechanism と drive— に行動を分つことであった。

註: Woodworth は恐らく、「drive」という語を、motivation という言語の中に導入することに責を負っていた。P.T. Young (1936) との a personal communication に於て、彼は書いた……: 「animal psychology に於ける 'drive' の current use と other psychology に於ける 'drive' の current use は 'Dynamic Psychology' (1918) に於ける私の用語から出ている、ということをおあなたは仮定していると信ずる」と書いた。私は、以前の心理学者の用語から引き出しているのではないことは確かである。彼は、それを mechanics (力学的体制) から得ていた。a machine は、a mechanism を持っているように、それが motion の中に置かれると、それはある方途 (way) に於て、operates する; しかし、それは、move するために driven されねばならない、のである。a machine の「drive」は、それを、motion の中に置くエネルギーの供給である。

—The Energy of Man

彼の場合、mechanism は、如何にわれわれは或事柄 (a thing) を成すか、ということに関係していた; 然しながら、drive は、何故 (why) それをなすのか、ということに関係していた。

Woodworth が、この区別をした例は、野球のゲームに於ける投手の古典的ケースであった。「mechanism の問題は、彼が如何に志向しているかという問題である。距離を測りカーブの量を如何に測るかということ、それに、彼の movements を同調さし、望まれた目的を、どのように生み出すかという方法論である。drive の問題は又別で、彼は全く行為に於て従事している理由を問うものである。何故、全き従事活動が出来るかと。又、別の日でなく、ある日に、よりよく投げうる理由をいうものである。又、別のバッター (打者) でなく、あるバッターに対してだけ、よりよく奮起することができる理由をいうものである。そして多くのよく似た質問をすることが出来る」(全て、こうした理由をとうことは、動因というものは、何かの理由に基づいて運動を起すエネルギーを持っているに違いない、ということ、Woodworth は指摘しているのである。)(Woodworth 1918)。

mechanism と drive の間の区別が、マシンの action を例にとって説明がなされるならば、drive はすなわち、力 (power) である。マシンを進行させる power である。一方、マシン自体は、mechanism である。この2つの区別は、決して絶対的なものではない。なぜなら、Woodworth は、個々のあらゆる動因は、それ自体 mechanism である、と信じていた。

問題の crux (最重要点) 及び (解き難い) puzzle の中心は、個人が遂行する能力を持っている多くの活動 (activities) というものは、mechanisms それ自体であるといえ、個々の活動は、本能的動因 (drive of an instinct) を要求するかどうか、ということであり、あるいは、個々のメカニズムは、このような本能的動因の支持なしに、直接に行為が生起せしめられ、そして、行動の進行がある、かどうか、ということである。Woodworth は、は、つぎのようなことを信じていた……単純な反射 (reflexes) を除く mechan-

ism は、それ自体の drive を供えているのみならず、他の mechanism に drive を貸すこともできる。従って、多くの activities は、特殊な本能 (food getting 食物採取, exploration 探究) から供される諸動因を持つことができる、としても、このような instincts は、the initiator (発動者) に過ぎない。而して、mechanisms 自体は、activity が永続するように drive に供する、というのが Woodworth の考え方である。こうした、その際の mechanisms は、後続行動のモチベーションな先行条件である (such mechanisms became the motivational antecedents for subsequent behavior.)。

——Functional Autonomy 機能的自律

Woodworth の立場と類似の立場、そして、可成りの注目を魅いたものは、Allport (1937) のそれであった (Personality: A Psychological Interpretation)。彼のこの text によれば、人間の行動の多くは、physiological needs によって支配されている、という信念を拒否するものである。Allport は、functional autonomy の概念を強調した。その原理は、Allport の次の引用文によって最もよく説明されている：「The dynamic psychology は、無限に変化するものとしての adult motives に関して、ここで提出しているのであり、self-sustaining, contemporary systems (自己維持的・自己支持的時間的体系) として、これを提出するのであり、先行体系から生長するものであって、それ自身が、機能的に何かに依存するということがないことをいう。」 (Allport, 1937)

Allport の説を支えているものは、anecdotal evidence である。a workman は、本来的に、security を得るために、又、他人の賞讃を得るために、「きれいに裁断された」仕事をする。good workmanship のための羨望すべき声価と同様に、security が達成されて来た後長くしてから、workman は、自分の高度の標準を維持し続ける。a need for the security と、a need for praise of others が、優秀な workmanship に対して本来的に責を負っていたけれども、行動は、それ自体に於ける a motive、すなわち、行動に対して責任を負うべき original motives から機能的に独立的な a motive になっていたのである。彼の立場を支持するために、Allport によって使われた行動の他のタイプは circular reflex であった。その循環的反射は、1つの行為の非常に多くの反復の後、子供は、それ自身のために繰返す；強化を要求しない条件反応の存在；original motivation の後長く永続する neurotic behavior は、消失した。

かかる概念は、人間の complex motivational structure を考量する中に、いかに魅力的にあらうとも、mounting criticism は、それに対抗するために水準化されたのである。

Bertocci (1940), Mc Clelland (1942), Rethlingshafer (1943), Oppenheimer (1947) は、その operation の完全に、精査的な分析を全て供給した。

Mc Clelland (1942) は、次のようなことを提案した。functional autonomy とは、消去 (extinction) の特殊ケースにしか過ぎないと——消去は、期待された観察者よりも長く延引して現われた。それは現存在する異常な諸要因を持つが故にである。かかる諸要因は、次のようなものであろう。

(1) motive の非存在の為の不十分な標準。

刺激が除去されることは、それを現実に証明するよりは (何故取除されたのかということとを証明することよりも) 述べることの方がた易い。

Bayer (この experimental work は、Andersonによって引用された。1941) は、次のようなことを見出した：動物は、満足する (be satiated) であろうと判断したら食べるで

あろうと。このことは、適切な1つのケースとして引用された。

(2) anticipatory instigations. 予期刺戟。

ある例に於ては、研究は、1つの予期又は期待である（かも知れない）。instigator（刺戟者、誘発団）の除去は、必ずしも予期（anticipation）を除去しない。（誘発団がなくても予期は存在する——人間に於ける希望 hope の存在）

(3) 刺戟の不適當な同一視（化）。

complex behavior に於ては、多くの instigator が存在するかも知れない。1つの誘発団の除去は、全ての誘発団を除去しない。

(4) 条件づけられた instigators.

ここでは、刺戟の除去は、道具的な行為に向って条件づけられた刺戟は、ある時間たてば、十分な強度を保持しない、ということを保証するものではない。

(5) 発露すべき、道具的行為を期待する最終的基礎は、全ての中で最も共通的なことである。——報酬の除去もそうである。すなわち明らかに消去過程がそれであるといえる。多くの諸条件（例えば、部分的な強化）は、かかる行動は、functionally autonomousとして、その際分類されよう、という結果でもって、消去を延引することに貢献しているのである。

(Hall, J.F. : Psychology of Motivation. Chicago: J.B. Lippincott Company, 1961, pages 39—43)

参 考 引 用 文 献

- 1) H.A.Murray et al : Explorations in Personality. 1938. (外林大作訳編「パーソナリティ(1)」誠信書房, 昭36. 昭38 (1963))
- 2) 時実利彦著「人間であること」岩波新書746, 岩波書店 1970.
- 3) Henry A. Murray, M.D., PH.D. : Explorations in Personality-a Clinical and Experimental Study of Fifty Men of College Age 1938 Oxford University Press
(マアレー編・外林大作訳編／パーソナリティ(1)／誠信書房 1961¹⁾, 1963²⁾)
- 4) 今田恵著「現代の心理学」1958¹⁾, 1964, 岩波全書241。
- 5) ジョン・B・ワトソン著, 安田一郎訳, 「行動主義の心理学」河出書房, 1968.
- 6) 佐藤幸治著「人格心理学」心理学全書11, 1961, 創元社。
- 7) 相良守次編「現代心理学の諸学説」岩波書店, 1964¹⁾, 1966²⁾